

# 講義の風景

文学部

島村直幸 非常勤講師

Naoyuki Shimamura

「国際関係論」

〔木曜3限〕

文学部なのに国際関係論？そう思われる方も多いかもしれない。しかし、木曜日3限、多摩キャンパス3号館3552教室で行われる国際関係論の講義を楽しみにしている文学部の学生は多い。

法学部と経済学部でも講義毎週レジュメを配布、新聞も教材に

講義を担当される島村直幸先生は、中央大学だけではなく、他にも5つの大学で非常勤講師をされ、また中央大学では、文学部だけではなく、

法学部、経済学部でもそれぞれ「国際政治学」「国際関係論」の講義を担当されている。

そんな島村先生の授業は、毎回熱い。だから、おのずと講義の内容が頭に入ってくる。講義は、先生作成によるレジュメや新聞記事、またヨーロッパで発行される英字新聞のInternational Herald Tribuneを用いて進められる。

時には、英字新聞の読み方やTOEFLの点の取り方など英語の授業になることもあり、毎回、刺激的である。だから出席確認を取らないにもかかわらず、受講生は多い。

## 2008年アメリカ大統領選を熱く語る 出席確認を取らないのに多い受講生

《しまむら・なおゆき 国際関係論、特にアメリカ政治外交が専攻。青山学院大学やフェリス学院大学院では「国際関係史」「アメリカ外交史」「現代アメリカの政治」を担当。共訳にヘンリー・ナウ(村田晃嗣ほか訳)『アメリカの対外

閣与』(有斐閣、2005年)、共著に石井修・滝田賢治編『現代アメリカ外交キーワード』(有斐閣、2003年)、吉原欽一編著『現代アメリカの政治権力構造』(日本評論社、2000年)など》

「本と新聞を読み、英語をマスターしよう」  
講義の冒頭に参考文献を紹介

この日の講義では、「来年、再来年、3年後、就職活動が確実に厳しくなります」と、「サブプライム」金融危機と「リーマン・ショック」

によるアメリカ発のグローバル金融危機が日本経済にもダメージを及ぼし、学生の就活にも影響してきている話からはじまった。

そのうえで、こう続けた。「学生のうちに1冊でも多く本を読んでもいい。また毎日、新聞を読む習慣をつける。見出しだけでも良いから、



読んで欲しい本の紹介

毎日新聞をめくって行く。それが1ヶ月過ぎ、3ヶ月過ぎ、6ヶ月過ぎると国際政治、世界経済の動きが次第に理解できるようになる」。

講義の序盤だというのにエンジン全開だ。「第1に1冊でも多く本を読む、第2に毎日新聞を読む習慣をつける、第3に言い訳せずに今日から英語を始めよう」とアドバイスし、

受講生を奮い立たせた。

そして、講義では時々行われる本の紹介をはじめた。読書を奨励するためだ。本のカバー表紙を教壇の上に順々に並べながら、本を紹介。この日は、国際政治学を学ぶ上で読む必要があるE・Hカーの『危機の20年』をはじめ、勝海舟の『氷

川清話』や塩野七生の『ルネサンスとは何であったのか』などの本が紹介された。

**用意された参考資料は10枚**  
**テーマは「アメリカ大統領選を見る眼」**

ここからようやく講義の本編に入る。まず島村先生作成のレジュメ3



島村直幸講師

枚と新聞のコピー5枚、それから資料2枚の計10枚が配布され、本編の講義がスタート。毎回大量のレジュメや資料が配られて、果たして時間内に全部終わるのだろうか、と疑問を持つのだが、島村先生は「大丈夫。なぜなら、天才だから」と言い、この日も学生から笑いを誘った。

この日は、アメリカ大統領選挙でバラク・オバマ氏が勝利した翌週だったため、「2008年大統領選挙を見る眼」がテーマ。島村先生は国際関係論が専攻、特にアメリカ政治外交（史）を研究しているということもあり、講義には自然と力が入る。以下は講義の内容だ。

アメリカ大統領選挙の投票は、平日である火曜日に行われる。これは、「エリートによる統治」という古い考えや制度がいまだに残っているからだ。黒人や貧しい人たちが、平日には投票に行かない。また同じ理由から、事前に「有権者登録」が必要で、日本のように投票用紙が送られてくることはない。1970年代の「ウォーターゲート事件」も加わり、大統領選挙は過去30年間、50%前後の低投票率である。

次に、アメリカ大統領選挙のシステムについて。大統領選挙では、50州の州ごとに人口に応じて配分された大統領選挙人538名の過半数270名以上を獲得した大統領候補が次期大統領になる。州ごとに1月から予備選挙があり、11月の本選挙も州ごとに戦われていく。

そこで、島村先生は、2008年アメリカ大統領選挙で「激戦州」と位置づけられたフロリダとオハイオなど中西部の7つの州を新聞記事で確認。そして、「スウィング・ボーター」とも呼ばれる無党派層が今回の選挙に与えた影響や、「ブラットリー・エフェクト」と呼ばれる人種差別の影響がどれだけ働いたか（世論調査では「黒人大統領を許容する」と答えても、特に保守的な白人男性は投票日には白人候補に投票する）、について検証した。

さらに、大統領選挙と同時に進む上下両院の議会選挙についても言及。「アメリカ政治では、30年強のサイクルで保守とリベラルが入れ替わってきた」と説明し、「2008年は、1932年と1968年と同様、歴史の転換点になりうる。タ

イミンダだけではなく、『1000年に一度』の金融危機とイラクからの『名誉ある撤退』という歴史的な課題を同時に2つも抱えている点が注目される」と解説した。

### 早口、でもわかりやすい講義 オバマの勝因、マケインの敗因は何か？

島村先生は、早口だ。時々、追いつけない。でも繰り返して、わかりやすく講義するので、学生たちの理解は進む。

講義は「オバマがなぜ勝ち、マケインはなぜ負けたのか？」へ。「結果的に経済でオバマは選ばれた」とオバマ氏の勝因を指摘し、これに対して、「マケインは特に、『アメリカ経済のファンダメンタルズは依然強い』という9月15日の失言が敗北へとつながった」と分析。また選挙資金不足により、民主党の予備選挙が長期化していた6月までに激戦州で「オバマ包囲網」を作れなかったこともマケイン氏が敗北した原因の一つだとも指摘した。

そこで島村先生は「しかし」と言葉をつなぎ、「一見オバマ圧勝に見える今回の大統領選挙ではあるが、

投票率で見ると意外と接戦だった。特に激戦州では大接戦だった」と言う。

では、オバマはこれから何をすべきなのか？「オバマ次期大統領の100日間」で迅速かつ強力な指導力を発揮し、『ニューデール』

政策のパート2を断行し、アメリカ議会に関連立法を可決させ、世界経済の安定化を図ることが強く期待される」と言う。1929年世界大恐慌後の1930年代、フランクリン・

ルーズベルト大統領が5年、10年かけて20世紀型のグローバル金融危機を乗り越えたように、「オバマ次期

### 気迫のこもった90分 盛り沢山の内容に受講生はぐったり？

さらに「オバマ次期大統領は、70年代はじめのベトナム戦争の泥沼化の時のように、イラクから『名誉ある撤退』をしなくてはならない。できるだけ『名誉のある』形でイラクから撤退しないと、イラクと中東地域が不安定化し、アメリカの威信も低下してしまう」と外交の課題も挙げた。

最後に、「メディアと専門家の予測は特に近年、残念ながらほとんど当たらない。だから本日の島村直幸の講義も、良い意味で批判的に聴いてほしい。学生のみなさんが自分自身で考え、自分自身の考えを涵養することが大切だ」と言い、講義を終えた。

90分の講義が、とても90分とは思えないほどの盛り沢山な内容の講義であった。そのためか、毎回受講生は、講義が終わると、疲れ切った表情で教室を出て行く。それだけ、島村先生の気迫に圧倒されてしまっているということだろう。



### 出席はとらないが、人気の講義

大な大統領として歴史に名前を残そうとするはずだ」と強調した。だが、「世界経済の現状は、決して楽観視できない厳しい情勢だ」とも付け加えた。

1930年代の世界大恐慌期の時代背景をイメージとして把握するために、島村先生は映画『シービスケッツ』を観ると良いと薦め

(学生記者 上田雄太「文学部3年」)